

解答例

分からないことは、すぐ AI（人工知能）に聞き、その答えを鵜呑（うの）みにする。そうした安易な使い方が子どもたちに広がらぬよう、学校は慎重に対応する必要がある。

「チャット GPT」などの生成 AI を学校現場でどう扱うかについて、文部科学省が小中高校向けの指針を公表した。

生成 AI には、個人情報の流出や著作権侵害、偽情報の拡散などのリスクがあり、思考力や学習意欲への影響も懸念されると指摘した。そのうえで、学校では「限定的な利用から始めることが適切だ」との見解を示した。

特に、情報活用能力が十分ではない小学生に使わせることには慎重な姿勢を求めた。まずはリスクに対応できる一部の学校で試行的に取り組むべきだとしている。

生成 AI は、使い方次第で新しい価値の創造につながるのだろうが、現段階で子どもに使わせるには問題が多すぎる。指針は、学校現場での性急な利用に注意を促すもので、子どもの発達段階を踏まえた妥当な内容だと言える。

指針は、活用例として「英会話の相手として使う」といったケースを挙げる一方、「生成 AI で作ったリポートを自分のものとして提出する」などを不適切な例として示した。夏休みを控え、宿題を出す際の参考になるだろう。

課題は「教師力」の向上だ。

情報技術分野は、専門性が高く、指導に不安を覚える教員が多い。AI の利点や課題、著作権侵害に当たる事例などの知見を高めねばならない。各教育委員会は研修の充実に取り組んでほしい。

学校現場ではすでに、英作文の宿題を出したところ、チャット GPT の回答を丸写しして提出するような生徒も出始めている。

一般に高校生の場合、学習の成果や作文コンクールの受賞歴などが、大学の総合型選抜（旧 AO 入試）や学校推薦型選抜に使われ、可否を左右する。不正をどのように見抜くかは難しい課題だ。

評価や入試への活用を巡っては提出物を確認するだけでなく、発表や面接を通じて、本人の理解度を丁寧に測る必要がある。

教育の目的は「人格の形成」にある。自分で考え、自由に行動し、その結果に責任を持つ。それが自律的な人間だ。思考を放棄し、AI の言う通りに行動して失敗したら、責任は誰が負うのか。

AI はあくまで道具であり、万能ではない。「最後は自分で考え、判断する」という原則を、まずは子どもたちに学ばせたい。

出題意図

課題文は英字新聞の社説記事である。知的生産活動に対する規範意識に関連する長文が論理的に矛盾なく読解できているかどうかを審査することが意図である。